

あるじでえ

No. 4①

世田谷区教育委員会 民家園係
〒157-0067 世田谷区喜多見 5-27-14

◎ 次大夫堀公園民家園
☎ 03 (3417) 8492

◎ 岡本公園民家園
☎ 03 (3709) 6959

平成14年 3月27日 発行
平成16年 5月 増刷

茅葺き屋根の修繕方法とその維持管理

——— 旧秋山家土蔵の作業を中心に ———

平成12年度、次大夫堀公園民家園に移築復元されている旧秋山家土蔵において、旧来の技法や手順により、茅葺き屋根の修繕を行いました。

一般的に茅葺き屋根は、こまめに補修をすれば、30年は十分に耐えるといわれています。しかし旧秋山家土蔵の場合、移築後13年でしたが、傷みが進んだため、この時期に修繕をすることになりました。傷みを早めた原

因には、鳥が茅を引き抜くなどの外的被害の影響もありましたが、なによりも土蔵という建物の性格上、茅の保護につながるはずの煙でいぶすことができなかつたことにもあると考えられます。

以下は、その時の作業の話を織り交ぜながら、茅葺き屋根の修繕の仕方をご紹介します。

なお今回の修繕は、群馬県在住の茅葺き師五十嵐さんをお願いしました。



写真1 新しい茅を差し込む (平成12年度民家園で行われた茅葺き見学会&体験会)

1 旧秋山家土蔵の修繕方法

今回の修繕では、少し規模の大きい「差し茅（後述）」という手法が用いられました。また、棟も傷んでいたため、旧状通りの竹簧巻き^{註1}でつくり直しました。

作業手順は、まず横1列ずつ短い茅や傷んでいる古い茅を外に引き出し、まだ使用できる古い茅を押し上げ、新しい茅をその下に差し込みます【写真1】。この作業を軒先から始め、棟に向かって順次進めていきます。こうすると古い茅と、新しい茅とがサンドイッチのように交互になります。

この際、丸太を屋根面上に横に渡し、それを足場とします。この足場を、足代丸太と呼んでいます。

また、場所によって茅を押えるホコダケ^{註2}が弱っていたので交換しました。世田谷では、ホコダケには真竹を使用していましたが、今回はえごの木を使用しました。

つぎに、屋根面全体をツチ^{註3}でたたいて、平らにします【写真2】。

最後に足代丸太をはずしながら、屋根面を棟側から軒先に向かって鉋^{はきみ}で刈り込んでいき【写真3】、全体の形を整えて完成です。

できあがり、遠くからみると一列ずつ交互に色が異なるため、横縞模様^{よこしま}にみえます【写真4】。

2 世田谷の職人と茅事情

区内にもかつては、各村に2～3人は茅葺き師がいました。この人たちの多くは農民で、農閑期の余業としておもに冬に作業をしていました。しかし、昭和30年代初め頃には茅葺き民家も少なくなり、職人の姿も消えていきました。

また、世田谷にあった茅葺き屋根は、実際に100%茅^{註4}が使用されたのではなく、麦藁や稲藁も一緒に入れ込んで葺かれていました。



写真2 ツチで屋根面をたたく
(平成12年度民家園で行われた茅葺き見学会&体験会)



写真3 鉋で刈る
(平成12年度民家園で行われた茅葺き見学会&体験会)

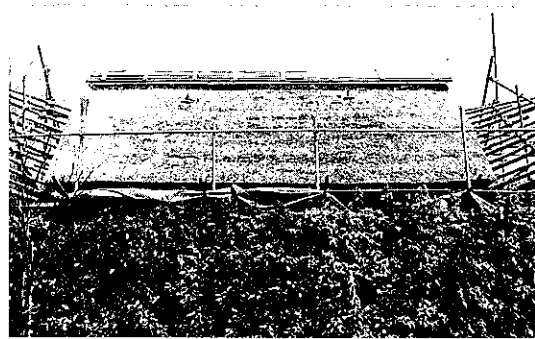


写真4 修繕を終えた旧秋山家土蔵
(平成12年度撮影)

茅は村や個人所有の茅場で育てられ、日頃から屋根替えに備えられていました。喜多見近辺では現在の成城付近に、その茅場があったといわれています。

そして、茅無尽・茅講^{註5}あるいは結い^{註6}などと呼ばれた相互扶助により、準備から屋根葺きまで協同作業として行なわれました。

3 茅葺き屋根の修繕の仕方

では、他に茅葺き屋根の修繕には、どのような方法があるのでしょうか。

地域や茅葺き師の流派により若干の違いがあり、また部材の呼び方、使用される材料も多少異なりますが、修繕方法はだまかに以下の3つに分類されます。

(1) 丸葺き

茅葺き屋根の修繕方法として、葺いてある茅を丸々剥いで、屋根の下地部分から修繕して葺き替える「丸葺き」が、よく知られています。

詳細に関しては、平成5年に当民家園で開催した企画展『茅葺き師』の図録をご覧ください。

(2) 分割葺き

北陸や東北などでは屋根面積の規模が大きいことから、屋根面をいくつか分割して、数年ごとに順繰りに葺き替えて維持する方法を「分割葺き」といいます。

終戦後、村人間の相互扶助が得られにくくなった地域でも同様に、この分割葺きが用いられました。

(3) 差し茅

丸葺きや分割葺きに対し、傷んだ茅を取って、新しい茅を差し込みながらその都度補修するのが「差し茅」です。

差し茅といっても、鳥などによる被害や、屋根面の勾配、陽当たり、風向きなどの影響で、ひとつの屋根でも場所により傷み具合が異なります。その状況に応じて、家人自らがその都度、部分的に修繕する場合もあれば、

10～15年毎に1回、茅葺き師を呼んで少し大規模に行く差し茅もあります。今回の旧秋山家土蔵の修繕は後者です。

この手法の利点は、茅の使用量が少なく済むので、材料の無駄がほとんどないことです。旧秋山家土蔵の修繕では、葺いてある茅全部を取り替える丸葺きの時の約3分の1で済みました。通常丸葺きでは、1坪当たり25束^{註7}～30束ですが、今回は1坪当たり10束ほどでした。

また、丸葺きが多く職人と手伝いが必要となるのに比べ、差し茅の場合は人手が少なく済みます。さらに丸葺きのように茅をすべて剥ぐ方法ではないので、家財道具などを濡らす心配もありません。今回の旧秋山家土蔵の場合も、3人の職人で約1ヶ月の工期で済みました。

そのほか、差し茅は時期にあまり左右されないのも特徴です。人手が少なく済むということは、丸葺きの時のように手伝いを確保するために、わざわざ農閑期を選ぶ必要もなくなるからです。ただし地域環境の違いにより、北国では春の雪どけと共に、南国では台風通過直後に行われていたようです。

以上、茅葺き屋根の修繕について述べましたが、屋根を少しでも長持ちさせるためには、日々管理をすることが必要です。

かつての民家では、囲炉裏や竈で薪を燃やしていましたが、そこからたちのぼった煙が屋根の茅をいぶし、また害虫を駆除することにより、茅自体の寿命を延ばしてきたのです。逆に茅を守る目的で、火を入れることもありましたが、昔の人は、薪を燃やすことがどういった効果をもたらすか、ということを知っていたようです。

このような理由もあって、当民家園では毎日囲炉裏に火を入れるようにしています。

(註1) 竹簀巻き

「…棟押え形式の一種を指す呼称。茅やその被覆材を半円形にまとめた上に簀子状に編んだ竹を巻く。巻き方やその棟端の意匠には、地方による差とそれぞれの呼称とがある。」

(『日本民家語彙解説辞典』より)

この形式は世田谷でもよくみられたようです。

(註2) ホコダケ

「…茅葺き屋根の葺き茅を押えている丸竹を指す呼称。」(『日本民家語彙解説辞典』より)

五十嵐さんはこの名称で呼んでいます。地域によってはオシボコダケ、オシボコ、オシボクなどの呼称もあります。

(註3) ツチ

「…葺き上げた茅面を叩いて均し、葺き足を揃えるのに用いる。厚板に丸太の柄をつけたものである。」(『日本民家語彙解説辞典』より)

「…25cm×10cm×10cm位の角材に1m位の柄を付けたもので、杉や松などの材で作られています。…世田谷辺りではセイツチあるいはトンコなどと呼ばれていました。」(『企画展 茅葺き師』より)

ガンギボウ(雁木棒)の呼称もありますが、五十嵐さんはツチと呼んでいます。

(註4) 茅

「…屋根を葺く草の総称で、チガヤ・スゲ・ススキなどをいいます。山茅・海茅・谷地茅と区別することもあり、海茅・谷地茅は上等なものとしてされています。」(『茅を葺く』より)

(註5) 茅無尽・茅講

「農村における結組織の一。屋根葺用茅の刈出または提供、およびそれを用いての屋根葺労働に関する組内・親戚間の労力交換の共同組織。これに要した労働力と茅・括縄などの材料との各戸における分担量は決められていて、同じ量だけ返還する慣習になっており、金銭や物で相殺することはできなかった。…茅無尽は主として関東の称で、関西では茅頼母子と称されることが多い。地方によって「茅講」ともいう。」(『建築大辞典』より)

(註6) 結い

「岐阜県大野郡地方や東京都三多摩地方・宮城県仙台市付近などをはじめ各地の農家において、組織内世帯間の労力交換の社会慣行を指す呼称。屋根葺き材の準備や葺き替え作業から、冠婚葬祭や農作業などにもおよぶ。」

(『日本民家語彙解説辞典』より)

(註7) 束

「茅の量の最小単位で、両手でつかめるほどの茅を一束にしたもの。」(『茅を葺く』より)

おもな参考文献

『建築大辞典』1976年 彰国社刊

『日本民家語彙解説辞典』1993年 日本建築学会民家語彙集録部会編 日外アソシエーツ刊

『茅葺きの民俗学』1983年 安藤邦廣 はる工房刊

『甍った古民家 旧長崎家主屋保存の記録』1981年 世田谷区教育委員会刊

『世田谷の土蔵 旧秋山家土蔵保存の記録』1993年 世田谷区教育委員会刊

『企画展 茅葺き師』1993年 世田谷区教育委員会刊

『茅を葺く』1996年 世田谷区教育委員会刊